

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公 開 特 許 公 報(A)

(11) 特許出願公開番号
特開2017-178444
(P2017-178444A)

(43) 公開日 平成29年10月5日 (2017. 10. 5)

(51) Int.Cl.			F 1			テーマコード (参考)		
B 6 5 D	23/10	(2006.01)	B 6 5 D	23/10		Z	3 E 0 6 2	
B 6 5 D	23/08	(2006.01)	B 6 5 D	23/08		B		
B 6 5 D	25/42	(2006.01)	B 6 5 D	25/42				
B 6 5 D	25/20	(2006.01)	B 6 5 D	25/20		K		
B 6 5 D	25/28	(2006.01)	B 6 5 D	25/28	1 1 0			
審査請求 未請求 請求項の数 8 O L (全 17 頁)								

(21) 出願番号	特願2016-73342 (P2016-73342)	(71) 出願人	000186588
(22) 出願日	平成28年3月31日 (2016. 3. 31)		小林製薬株式会社
			大阪府大阪市中央区道修町四丁目4番10号
		(74) 代理人	100124039
			弁理士 立花 顕治
		(74) 代理人	100156845
			弁理士 山田 威一郎
		(74) 代理人	100124431
			弁理士 田中 順也
		(74) 代理人	100112896
			弁理士 松井 宏記
		(74) 代理人	100179213
			弁理士 山下 未知子
最終頁に続く			

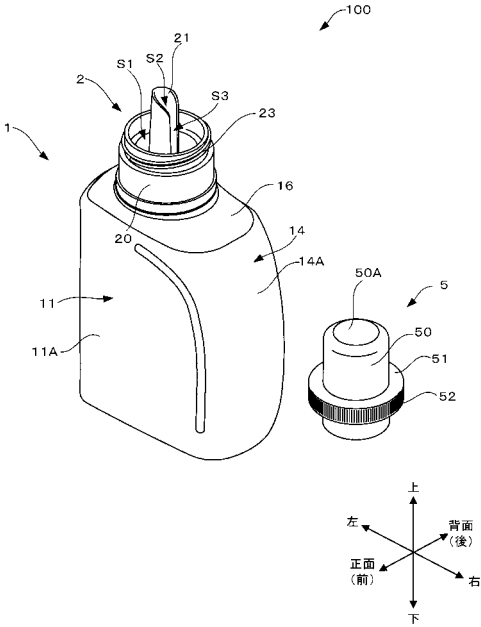
(54) 【発明の名称】 容器

(57) 【要約】

【課題】使用者の手の大きさに依存せず、手での保持性の高い容器を提供する。

【解決手段】注ぎ口を有し、内容物を内部に収容可能な容器が提供される。前記容器は、側壁部を備える。前記側壁部は、平らな又は滑らかに湾曲した第1外壁面と、平らな又は滑らかに湾曲した第2外壁面とを有する。前記第1外壁面は、前記注ぎ口を介して前記内容物を注ぎ出すべく当該容器を手で把持した把持状態で、親指に接触する位置に配置される。前記第2外壁面は、前記把持状態で、前記手の前記親指以外の指に接触する位置に配置される。前記第1外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第1凸部が形成されている。前記第2外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第2凸部が形成されている。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

注ぎ口を有し、前記注ぎ口を介して注ぎ出される内容物を収容可能な容器であって、
平らな又は滑らかに湾曲した第 1 外壁面と、平らな又は滑らかに湾曲した第 2 外壁面と
を有する側壁部、
を備え、

前記第 1 外壁面は、前記注ぎ口を介して前記内容物を注ぎ出すべく当該容器を手で把持
した把持状態で、親指に接触する位置に配置され、

前記第 2 外壁面は、前記把持状態で、前記手の前記親指以外の指に接触する位置に配置
され、

前記第 1 外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第 1 凸部が形成されており
、前記第 2 外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第 2 凸部が形成されている
、
容器。

10

【請求項 2】

前記第 1 凸部は、前記第 1 外壁面上において、概ね前記注ぎ口の注ぎ方向に沿って延び
る第 1 部位、及び、概ね前記注ぎ方向に直交する方向に沿って延びる第 2 部位の少なくと
も一方を含み、

前記第 2 凸部は、前記第 2 外壁面上において、概ね前記注ぎ口の注ぎ方向に沿って延び
る第 3 部位、及び、概ね前記注ぎ方向に直交する方向に沿って延びる第 4 部位の少なくと
も一方を含む、

請求項 1 に記載の容器。

20

【請求項 3】

前記第 1 凸部は、前記第 1 部位及び前記第 2 部位を含み、

前記第 2 凸部は、前記第 3 部位及び前記第 4 部位を含む、

請求項 2 に記載の容器。

【請求項 4】

前記注ぎ口は、当該容器の当該注ぎ口を除く部分の中心軸からずれた位置に配置されて
おり、

前記第 1 部位及び前記第 3 部位は、それぞれ前記第 1 外壁面及び前記第 2 外壁面上にお
いて、前記中心軸に対し前記注ぎ口と反対側に配置されている、

請求項 3 に記載の容器。

30

【請求項 5】

前記注ぎ口を塞ぐように取り付け可能な計量カップ
をさらに備える、

請求項 1 から 4 のいずれかに記載の容器。

【請求項 6】

前記第 1 外壁面及び前記第 2 外壁面は、互いに間隔を空けて対向しており、当該間隔が
当該容器の一端部に向かって狭まるように配置されている、

請求項 1 から 5 のいずれかに記載の容器。

40

【請求項 7】

前記第 1 凸部及び前記第 2 凸部は、前記把持状態で前記手が配置される側の当該容器の
端部の近傍において当該端部に沿って延びている、

請求項 1 から 6 のいずれかに記載の容器。

【請求項 8】

前記第 1 凸部及び前記第 2 凸部を覆うように前記側壁部に巻き付けられたシュリンクフ
ィルム

をさらに備える、

請求項 1 から 7 のいずれかに記載の容器。

【発明の詳細な説明】

50

【技術分野】

【0001】

本発明は、注ぎ口を有する容器に関し、特に、手で把持して内容物を注ぎ出すタイプの容器に関する。

【背景技術】

【0002】

市販のトイレ用洗剤、衣料用洗剤、食器用洗剤等は、しばしば、注ぎ口を有する容器に収容されている。そして、この種の製品の使用時には、容器を手で把持して、注ぎ口を介して内容物を注ぎ出す作業が要求されることがある。このような製品は、内容物により全体の重量が重くなることもあり、特に比較的手が小さく、握力の弱い女性や高齢者の場合、使用時に容器を落としてしまい、内容物をこぼしてしまうことがある。そのため、以上のような製品に用いられる容器をはじめとして、手で把持して内容物を注ぎ出す作業が想定される容器においては、手で保持し易いことが重要となる。そして、従来、容器の保持性を高めるために、側面部に一对の窪みが設けられた容器が知られている（特許文献1，2参照）。この一对の窪みは、窪みに指先を挿入して窪みの底を指先で押さえつけるようにすることで、容器を把持し易くしている。

10

【先行技術文献】

【特許文献】

【0003】

【特許文献1】特開昭61-43535号公報

20

【特許文献2】特開平11-130074号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

しかしながら、特許文献1，2のような一对の窪みの底を指先で押さえつける把持の態様では、指先のみで容器を保持することにもなり得、十分な保持性を発揮できるとは限らない。勿論、指先を窪みに挿入しつつ、手の平等の指先以外の手の部位を容器の側面部に接触させて容器を把持することも考えられるが、特許文献1，2の容器をこの態様で把持できるかどうかは、使用者の手の大きさに依存する。従って、特許文献1，2の把持部は、どのような大きさの手にも対応できるものではない。

30

【0005】

本発明は、使用者の手の大きさに依存せず、手での保持性の高い容器を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

第1観点に係る容器は、注ぎ口を有し、内容物を内部に収容可能な容器であって、側壁部を備える。前記側壁部は、平らな又は滑らかに湾曲した第1外壁面と、平らな又は滑らかに湾曲した第2外壁面とを有する。前記第1外壁面は、前記注ぎ口を介して前記内容物を注ぎ出すべく当該容器を手で把持した把持状態で、親指に接触する位置に配置される。前記第2外壁面は、前記把持状態で、前記手の前記親指以外の指に接触する位置に配置される。前記第1外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第1凸部が形成されている。前記第2外壁面上には、連続的又は不連続的に筋状に延びる第2凸部が形成されている。

40

【0007】

第2観点に係る容器は、第1観点に係る容器であって、前記第1凸部は、前記第1外壁面上において、概ね前記注ぎ口の注ぎ方向に沿って延びる第1部位、及び、概ね前記注ぎ方向に直交する方向に沿って延びる第2部位の少なくとも一方を含む。前記第2凸部は、前記第2外壁面上において、概ね前記注ぎ口の注ぎ方向に沿って延びる第3部位、及び、概ね前記注ぎ方向に直交する方向に沿って延びる第4部位の少なくとも一方を含む。

【0008】

50

第 3 観点に係る容器は、第 2 観点に係る容器であって、前記第 1 凸部は、前記第 1 部位及び前記第 2 部位を含む。前記第 2 凸部は、前記第 3 部位及び前記第 4 部位を含む。

【 0 0 0 9 】

第 4 観点に係る容器は、第 3 観点に係る容器であって、前記注ぎ口は、当該容器の当該注ぎ口を除く部分の中心軸からずれた位置に配置されている。前記第 1 部位及び前記第 3 部位は、それぞれ前記第 1 外壁面及び前記第 2 外壁面上において、前記中心軸に対し前記注ぎ口と反対側に配置されている。

【 0 0 1 0 】

第 5 観点に係る容器は、第 1 観点から第 4 観点のいずれかに係る容器であって、前記注ぎ口を塞ぐように取り付け可能な計量カップをさらに備える。

10

【 0 0 1 1 】

第 6 観点に係る容器は、第 1 観点から第 5 観点のいずれかに係る容器であって、前記第 1 外壁面及び前記第 2 外壁面は、互いに間隔を空けて対向しており、当該間隔が当該容器の一端部に向かって狭まるように配置されている。

【 0 0 1 2 】

第 7 観点に係る容器は、第 1 観点から第 6 観点のいずれかに係る容器であって、前記第 1 凸部及び前記第 2 凸部は、前記把持状態で前記手が配置される側の当該容器の端部の近傍において当該端部に沿って延びている。

【 0 0 1 3 】

第 8 観点に係る容器は、第 1 観点から第 7 観点のいずれかに係る容器であって、前記第 1 凸部及び前記第 2 凸部を覆うように前記側壁部に巻き付けられたシュリンクフィルムをさらに備える。

20

【 発 明 の 効 果 】

【 0 0 1 4 】

本発明によれば、容器の側壁部の 2 箇所の外壁面（第 1 外壁面及び第 2 外壁面）上に、それぞれ連続的又は不連続的に筋状に延びる凸部（第 1 凸部及び第 2 凸部）が形成される。第 1 凸部は、注ぎ口を介して内容物を注ぎ出すべく容器を手で把持した状態で、親指に接触する位置に配置され、第 2 凸部は、同状態で、親指以外の指に接触する位置に配置される。また、第 1 外壁面及び第 2 外壁面は、平らに又は滑らかに湾曲した面を構成している。その結果、使用者は、容器を保持する際に、親指の任意の箇所を第 1 凸部に接触させつつ、親指の別の箇所で第 1 外壁面を押さえつけるとともに、別の指の任意の箇所を第 2 凸部に接触させつつ、当該指の別の箇所で第 2 外壁面を押さえつけることができる。すなわち、指で第 1 外壁面及び第 2 外壁面を押さえつけながら、親指のどこかを第 1 凸部に引っ掛け、別の指のどこかを第 2 凸部に引っ掛けることができるため、容器の外壁面上で指が滑って容器を落としてしまう事態が防止される。また、指の任意の箇所を第 1 凸部及び第 2 凸部に引っ掛けることが可能であるため、使用者の手の大きさに関係なく、第 1 凸部及び第 2 凸部に指を引っ掛けつつも、指の様々な箇所、場合によっては手の平までも容器に接触させながら、容器を保持することができる。以上より、本発明によれば、使用者の手の大きさに依存せず、手での保持性の高い容器が提供される。

30

【 図 面 の 簡 単 な 説 明 】

40

【 0 0 1 5 】

【 図 1 】 本発明の一実施形態に係る容器の外観斜視図。

【 図 2 】 図 1 の容器本体の正面図。

【 図 3 】 図 1 の容器本体の背面図。

【 図 4 】 図 1 の容器本体の平面図。

【 図 5 】 図 1 の容器本体の右側面図。

【 図 6 A 】 容器本体の把持状態の一例を示す図であって、正面側の様子を示す図。

【 図 6 B 】 図 6 A の把持状態における背面側の様子を示す図。

【 図 7 A 】 容器本体の把持状態の別の例を示す図であって、正面側の様子を示す図。

【 図 7 B 】 図 7 A の把持状態における背面側の様子を示す図。

50

【図 8 A】指が滑って凸部で止まったときの正面側の様子を示す図。

【図 8 B】図 8 A の状態における背面側の様子を示す図。

【図 9】変形例に係る容器本体の様々な概略断面図。

【図 10 A】別の変形例に係る容器本体の正面図。

【図 10 B】さらに別の変形例に係る容器本体の正面図。

【図 10 C】さらに別の変形例に係る容器本体の正面図。

【図 11 A】さらに別の変形例に係る容器本体の正面図。

【図 11 B】さらに別の変形例に係る容器本体の正面図。

【発明を実施するための形態】

【0016】

以下、図面を参照しつつ、本発明の一実施形態に係る容器について説明する。

【0017】

< 1 . 容器 >

図 1 に、本実施形態に係る容器 100 の外観斜視図を示す。同図に示されるように、容器 100 は、容器本体 1 と、容器本体 1 の注ぎ口 2 を塞ぐように取り付け可能なキャップ 5 とを備える。図 1 では、キャップ 5 が容器本体 1 から取り外された状態が示されている。また、図 2 ~ 図 5 に、容器本体 1 の正面図、背面図、平面図及び右側面図を示す。

【0018】

容器本体 1 内に収容される内容物は、液体状、粉末状、錠剤状等、様々な形態をとることができる。内容物は、使用者が手で把持して容器本体 1 を傾けることで、注ぎ口 2 を介して注ぎ出すようにして、容器本体 1 内から取り出される。このような内容物の例としては、トイレ用洗剤、衣料用洗剤、食器用洗剤等の薬剤が挙げられるが、ここでの例に限定されず、注ぎ口 2 を介して注ぎ出すようにして取り出すことが可能である限り、薬剤以外にも任意の内容物を収容することができる。以下、各部の構成について、詳細に説明する。

【0019】

< 1 - 1 . 容器本体 >

図 1 ~ 図 5 に示されるように、容器本体 1 は、4 枚の側壁部 11 ~ 14 と、底面部 15 と、天面部 16 を備えており、これらの部 11 ~ 16 は、略直方体形状の容器を構成している。また、天面部 16 からは、上方に向かって延びる注ぎ口 2 が連続している。底面部 15 は概ね平面状であり、容器 100 は、底面部 15 を水平な面上に置くことにより、安定して起立する。なお、以下では、特に断らない限り、図 1 に示されるとおりに、上下（縦）、左右（横）及び前後が定義されるものとし、側壁部 11 が正面側（前側）に、側壁部 13 が背面側（後側）に、側壁部 12 が左側に、側壁部 14 が右側に配置される。そのため、以下では、側壁部 11 を正面側壁部 11 と呼び、側壁部 12 を左側壁部 12 と呼び、側壁部 13 を背面側壁部 13 と呼び、側壁部 14 を右側壁部 14 と呼ぶことがある。なお、本実施形態では、側壁部 11 ~ 14 と底面部 15 と天面部 16 と注ぎ口 2 とは、一体的に構成されているが、複数の部品を着脱自在又は着脱不能に組み立てることで構成することもできる。

【0020】

本実施形態では、図 4 及び図 5 に示すように、正面側壁部 11 は、平面視において外側にやや凸の形状で、滑らかに湾曲した外壁面 11A を有しており、背面側壁部 13 も、平面視において外側にやや凸の形状で、滑らかに湾曲した外壁面 13A を有している。外壁面 11A と外壁面 13A とは、互いに間隔を空けて対向している。左側壁部 12 は、平面視において中央部が外側にやや突出するように、滑らかに湾曲した外壁面 12A を形成しており、右側壁部 14 も、平面視において中央部が外側にやや突出するように、滑らかに湾曲した外壁面 14A を形成している。また、図 2 に示すとおりに、右側壁部 14 は、正面視においても中央部が外側にやや突出している。外壁面 12A と外壁面 14A とは、互いに間隔を空けて対向している。なお、外壁面 11A ~ 14A は、上述したとおりそれぞれ全体として滑らかな湾曲面を構成しており、外壁面 11A ~ 14A には、指を挿入できる

10

20

30

40

50

程度の大きさの窪み等は形成されていない。そのため、容器本体 1 1 の容積が確保され、容積に対し容器本体 1 のサイズが大きくなり過ぎることはない。

【 0 0 2 1 】

図 4 に示すように、外壁面 1 1 A と外壁面 1 3 A との間隔は、容器本体 1 の右側壁部 1 4 側の端部に向かってやや狭まるように配置されている。言い換えると、容器本体 1 は、右側から左側に向かうにつれて、平面視において外壁面 1 1 A , 外壁面 1 3 A が開くように構成されている。その結果、容器本体 1 は、容器本体 1 の左側部分よりも右側部分の方が手で把持し易く、さらにこのことが使用者に分かり易いように構成されている。また、手が小さい使用者にとっても、容器本体 1 をしっかりと把持し易くなる。

【 0 0 2 2 】

注ぎ口 2 は、略円筒状である。注ぎ口 2 の中心軸 A 2 は、容器本体 1 の注ぎ口 2 を除いた部分（すなわち、側壁部 1 1 ~ 1 4 、底面部 1 5 及び天面部 1 6 から構成される部分）の中心軸 A 1 に対し、左側にずれている。ただし、中心軸 A 1 , A 2 は、共に概ね上下方向に延びており、略平行である。つまり、注ぎ口 2 は、容器本体 1 の全体の中で左側に偏っているため、使用者は、容器本体 1 を手で把持するときに、容器本体 1 の左側部分よりも右側部分を把持するように自然と誘導される。

【 0 0 2 3 】

注ぎ口 2 は、略円筒状の外壁部 2 0 と、外壁部 2 0 の内部に配置される同じく略円筒状の内壁部 2 1 とを有する。外壁部 2 0 と内壁部 2 1 とは、共に概ね上下方向に延びており、中心軸 A 2 を中心軸とする同軸の位置関係で配置されている。図 4 に示されるように、外壁部 2 0 と内壁部 2 1 との間の空間 S 1 には、底部 2 2 が形成されている。一方、内壁部 2 1 内の空間 S 2 には、底部が形成されておらず、容器本体 1 の内部空間と連通している。従って、容器本体 1 内の内容物を取り出すべく容器本体 1 を傾けたとき、容器本体 1 内の内容物は、内壁部 2 1 内の空間 S 2 を通って注ぎ出されることになる。すなわち、注ぎ口 2 による内容物の注ぎ方向は、概ね上下方向となる。一方で、外壁部 2 0 と内壁部 2 1 との間の空間 S 1 は、注ぎ口 2 を介して注ぎ出された内容物の余剰分を、容器本体 1 内に戻すのに役立つ。具体的には、内壁部 2 1 の最も右側の位置、すなわち、使用者が容器本体 1 を把持する側の位置には、概ね上下方向に延びるスリット S 3 が形成されており、スリット S 3 は、底部 2 2 付近まで達している。従って、内容物の余剰分を空間 S 1 に戻すことにより、当該内容物の余剰分をスリット S 3 を介して容易に容器本体 1 内に戻すことができる。

【 0 0 2 4 】

注ぎ口 2 の外壁部 2 0 の上部の外側表面には、当該外側表面に螺旋状に巻き付くような態様でネジ山 2 3 が形成されている。このネジ山 2 3 は、キャップ 5 に形成されている後述されるネジ山と螺合し、キャップ 5 を注ぎ口 2 に着脱自在に固定するのに役立つ。

【 0 0 2 5 】

図 2 に示すように、正面側壁部 1 1 の外壁面 1 1 A 上には、連続的に筋状に延びる第 1 凸部 3 0 が形成されている。また、図 3 に示すように、背面側壁部 1 3 の外壁面 1 3 A 上にも、連続的に筋状に延びる第 2 凸部 4 0 が形成されている。これらの凸部 3 0 , 4 0 は、外壁面 1 1 A , 1 3 A から等間隔の位置に広がる仮想面を基準として、互いに概ね対称な位置に配置されている（図 4 参照）。

【 0 0 2 6 】

第 1 凸部 3 0 は、外壁面 1 1 A 上において、下端付近から上方に向かって概ね上下方向に平行に延び、その後、滑らかに湾曲し、左に向かいながら上端まで延びる。従って、第 1 凸部 3 0 は、外壁面 1 1 A 上において、概ね上下方向に沿って延びる下部 3 1（第 1 部位）と、下部 3 1 の上端に連続し、概ね左右方向に沿って延びる上部 3 2（第 2 部位）とを有する。上部 3 2 は、右下から左上に向かって傾斜している。従って、上部 3 2 は、容器本体 1 を右側壁部 1 4 側から右手で把持したときに、親指を添え易くなっている（図 6 A 参照）。なお、左手で把持した場合には、親指以外の指である人差し指等を添え易くなっている。

10

20

30

40

50

【0027】

同様に、第2凸部40は、外壁面13A上において、下端付近から上方に向かって概ね上下方向に平行に延び、その後、滑らかに湾曲し、左に向かいながら上端まで延びる。従って、第2凸部40は、外壁面13A上において、概ね上下方向に沿って延びる下部41（第3部位）と、下部41の上端に連続し、概ね左右方向に沿って延びる上部42（第4部位）とを有する。上部42は、右下から左上に向かって傾斜している。従って、上部42は、容器本体1を右側壁部14側から右手で把持したときに、親指以外の指である人差し指等を添え易くなっている（図6B参照）。また、左手で把持した場合には、親指を添え易くなっている。なお、上記のとおり、凸部30, 40は、鏡面对称に配置されているため、容器本体1を左右のどちらの手で把持しようとも、同様の効果が発揮される。従って、以下では、簡単のため、主として右手で容器本体1を把持する場合を例に説明を行うが、左手で把持した場合も同様である。

10

【0028】

図6A及び図6Bは、容器本体1の典型的な把持の態様を示しており、図6Aは、正面側壁部11に添えられた右手の親指を示しており、図6Bは、背面側壁部13に添えられた右手の親指以外の他の指を示している。図7A及び図7Bは、容器本体1の別の典型的な把持の態様を示しており、図7Aは、正面側壁部11に添えられた右手の親指を示しており、図7Bは、背面側壁部13に添えられた右手の親指以外の他の指を示している。これらの図に示されるように、第1凸部30の下部31は、容器本体1を右側壁部14側から右手で把持した把持状態で、親指や拇指球が接触する位置にある（図6A及び図7A参照）。従って、かかる把持状態では、親指や拇指球が第1凸部30の下部31に引っ掛かり、指と正面側壁部11との摩擦が増すため、手が滑らかに湾曲した外壁面11A上で滑り、容器本体1を落としてしまう事態が防止される。第1凸部30の上部32は、拇指球が接触することは考えにくい、少なくとも親指に対して同様の滑り止めの機能を発揮し得る。また、使用者が、例えば図7Aに示すように、起立状態（注ぎ口2の注ぎ方向が鉛直上方を向いている状態を意味する）の容器本体1を把持している状態で、親指が外壁面11A上を滑ったとしても、親指は上部32に引っ掛かって止まるため、容器本体1が手から滑落することが防止される。

20

【0029】

一方、第2凸部40の下部41は、容器本体1を右側壁部14側から右手で把持した把持状態で、親指以外の指が接触する位置にある（図6B及び図7B参照）。従って、かかる把持状態では、親指以外の指が第2凸部40の下部41に引っ掛かり、指と背面側壁部13との摩擦が増すため、手が滑らかに湾曲した外壁面13A上で滑り、容器本体1を落としてしまう事態が防止される。第2凸部40の上部42も、小指や薬指が接触することは考えにくい、少なくとも人差し指に対して同様の滑り止めの機能を発揮する。また、使用者が、例えば図7Bに示すように、起立状態の容器本体1を把持した状態で、指が外壁面13A上を滑ったとしても、当該指は上部42に引っ掛かって止まるため、容器本体1が手から滑落することが防止される。

30

【0030】

注ぎ口2は、上記のとおり、概ね上下方向に延びている。そのため、容器本体1内から内容物を注ぎ出すためには、使用者は容器本体1の右側部分を手で把持して、注ぎ口2の注ぎ方向が略水平又は鉛直下方を向くように容器本体1を傾ける必要がある。そして、このような傾斜状態では、第1凸部30の下部31及び第2凸部40の下部41は、概ね水平方向に延びることになる。このとき、例えば、使用者が図7A及び図7Bに示すように（より正確には、図7A及び図7Bを90°傾けた状態で）容器本体1を把持しており、この状態から指が外壁面11A, 13A上を滑ったとしても、当該指は下部31, 41に引っ掛かって止まるため（図8A及び図8B）、容器本体1が手から滑落することが防止される。

40

【0031】

図2に示すように、第1凸部30は、外壁面11A上において、右側壁部14及び天面

50

部 1 6 の近傍に配置されており、さらに正面視において、右側壁部 1 4 及び天面部 1 6 に沿って延びている。また、図 3 に示すように、第 2 凸部 4 0 も、外壁面 1 3 A 上において、右側壁部 1 4 及び天面部 1 6 の近傍に配置されており、さらに背面視において、右側壁部 1 4 及び天面部 1 6 に沿って延びている。従って、容器本体 1 の右側部分、又は容器本体 1 の右上部分から容器本体 1 を把持しようとした使用者の手が、凸部 3 0 , 4 0 に触れ易くなっている。

【 0 0 3 2 】

平面視において、正面側壁部 1 1 の外壁面 1 1 A、右側壁部 1 4 の外壁面 1 4 A 及び背面側壁部 1 3 の外壁面 1 3 A 上に沿った、第 1 凸部 3 0 (より正確には、下部 3 1 の最右端部) から第 2 凸部 4 0 (より正確には、下部 4 1 の最右端部) までの距離を L としたとき (図 4 参照)、3 0 mm $\leq$ L $\leq$ 1 5 0 mm であることが好ましく、4 0 mm $\leq$ L $\leq$ 1 2 0 mm であることがより好ましく、4 0 mm $\leq$ L $\leq$ 8 0 mm であることがさらに好ましい。この場合、比較的手の小さな女性でも、容器本体 1 を容易に把持することができる。

10

【 0 0 3 3 】

第 1 凸部 3 0 及び第 2 凸部 4 0 の高さを w としたとき、凸部 3 0 , 4 0 の滑り止めの機能を効果的に発揮させるためには、w $\geq$ 1 . 0 mm であることが好ましく、w $\geq$ 1 . 5 mm であることがより好ましく、w $\geq$ 2 . 0 mm であることがさらに好ましい。また、凸部 3 0 , 4 0 に触れた手に痛みを感じさせないようにするためには、w $\leq$ 5 . 0 mm であることが好ましく、w $\leq$ 4 . 0 mm であることがより好ましく、w $\leq$ 3 . 0 mm であることがさらに好ましい。なお、高さ w とは、外壁面 1 1 A , 1 3 A (凸部 3 0 , 4 0 の両側の部分) からの凸部 3 0 , 4 0 の頂点までの高さである。また、第 1 凸部 3 0 の高さと第 2 凸部 4 0 の高さとは異なってもよい。また、凸部 3 0 の高さも場所によって異なるものであってもよく、凸部 4 0 についても同様である。

20

【 0 0 3 4 】

以上のとおり、使用者は、容器本体 1 を把持する際に、親指を第 1 凸部 3 0 に接触させつつ、親指の別の箇所を外壁面 1 1 A を押さえつけることができる。同様に、親指以外の別の指を第 2 凸部 4 0 に接触させつつ、当該指の別の箇所を外壁面 1 3 A を押さえつけることができる。すなわち、指で外壁面 1 1 A , 1 3 A を挟み込むように押さえつけながら、指を第 1 凸部 3 0 及び第 2 凸部 4 0 に引っ掛けることができるため、手が滑って容器本体 1 を落としてしまう事態が防止される。このように、容器本体 1 は、凸部 3 0 , 4 0 により手での保持性が高められている。また、図 6 A ~ 図 7 B に示すように、指だけでなく、手の平も右側壁部 1 4 の外壁面 1 4 A に接触させることができ、かかる態様で容器本体 1 を把持する場合には、さらに容器本体 1 の保持性が高められる。また、かかる態様で容器本体 1 を保持できるか否かは、使用者の手の大きさに依存せず、どのような大きさの手でも、容器本体 1 をしっかりと保持することができる。

30

【 0 0 3 5 】

本実施形態に係る容器本体 1 は、手で押せば多少変形するが、自重では変形しない程度の強度を有している。容器本体 1 の材質は、特に限定されないが、強度、軽量性、コスト、成形性、リサイクル性等の観点からすると、ポリエチレンやポリプロピレン等の樹脂製とすることが好ましい。

40

【 0 0 3 6 】

< 1 - 2 . キャップ >

続いて、キャップ 5 の構成について説明する。キャップ 5 は、容器本体 1 の内部に連通する空間 S 2 と、空間 S 2 にさらに連通する空間 S 1 とを、外部空間から密閉するための部材である。また、本実施形態のキャップ 5 は、容器本体 1 内から取り出された内容物を計量するための計量カップとなっている。

【 0 0 3 7 】

キャップ 5 は、円筒状のカップ部 5 0 と、カップ部 5 0 の外壁面に設けられた円環状のフランジ部 5 1 と、フランジ部 5 1 の外周部分から下方に延びる円筒状のシール部 5 2 とを有する。カップ部 5 0 とフランジ部 5 1 とシール部 5 2 とは、全て同軸に配置されてい

50

る。カップ部 50 は、図 1 の状態において天面部 50 A を有する。天面部 50 A は、キャップ 5 を容器本体 1 から取り外して鉛直下方に向けたとき、カップ部 50 の「底部」となる。カップ部 50 の側面には、メモリが刻まれており、容器本体 1 の内容物を計量し易くなっている。例えば、内容物の 1 回の使用量が決まっている場合には、カップ部 50 に 1 回分の内容物が注がれたときのカップ部 50 内における内容物の高さ位置を示すサインを刻むことができる。勿論、メモリが刻まれておらず、カップ部 50 のすり切れ一杯の量を基準に、計量を行うこともできる。

【0038】

図示されないが、円筒状のシール部 52 の内壁面にはネジ山が形成されており、当該ネジ山は、注ぎ口 2 の外壁部 20 に設けられているネジ山 23 と螺合する。そして、カップ部 50 の下部を、注ぎ口 2 の空間 S1 内に挿入して、上述のネジ山どうしを螺合させると、空間 S1、S2 が、外部空間から密閉される。この密閉状態で、注ぎ口 4 の注ぎ方向が略水平又は鉛直下方を向くように容器 100 を傾けると、内容物が空間 S2 を介してカップ部 50 内に注ぎ出されるが、これらの空間は密閉されているため、内容物が外部空間に漏れることはない。また、この状態の容器 100 を底面部 15 が鉛直下側を向くように再度起立させると、カップ部 50 内の内容物が液体である場合には、内容物は重力によりスリット S3 を通って容器本体 1 内へと自動的に戻っていく。一方、内容物が粉末状や錠剤状である場合には、容器 100 を振る等することで、内容物を容器本体 1 内へ戻すことができる。

【0039】

本実施形態に係るキャップ 5 は、手で押せば多少変形するが、自重では変形しない程度の強度を有している。キャップ 5 の材質は、特に限定されないが、強度、軽量性、コスト、成形性、リサイクル性等の観点からすると、ポリプロピレンやポリエチレン等の樹脂製とすることが好ましい。また、キャップ 5 は、透明又は半透明に形成されていることが好ましい。

【0040】

< 1 - 3 . シュリンクフィルム >

また、図 1 ~ 図 8 B においては図示されないが、容器本体 1 の外壁面 11 A ~ 14 A には、シュリンクフィルムを巻き付けることができる。シュリンクフィルムは、熱収縮したフィルムであり、外壁面 11 A ~ 14 A にぴったりと密着する。シュリンクフィルムの表面には、容器 100 を装飾する図柄を印刷することができる。なお、ここでいう図柄には、内容物に関する説明、例えば、内容物の商品名や成分表示等が含まれる。

【0041】

上記実施形態では、凸部 30、40 が形成されているものの、容器本体 1 は滑らかな外壁面を有している。従って、例えば、容器に取っ手が形成されていたり、大きな窪みが形成されていたりする場合に比べ、シュリンクフィルムを容易に取り付けることができる。なお、容器に窪みや取っ手が形成されている場合には、シュリンクフィルムにより当該窪みや取っ手が覆われてしまい、当該窪みや取っ手の本来の役割を果たすことができないことにもなり得る。しかしながら、本実施系形態のように、容器本体 1 が滑らかな外壁面を有する場合には、このような問題が生じない。

【0042】

シュリンクフィルムの材質は、特に限定されないが、典型的には、ポリ塩化ビニル、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリスチレン等とすることができる。

【0043】

< 2 . 容器の使用方法 >

以下に、容器 100 の使用方法について説明する。まず、容器 100 は、キャップ 5 で注ぎ口 2 を密閉した状態で保存される。そして、容器本体 1 内の内容物を取り出す際には、容器 100 の底面部 15 を鉛直下側に向ける。これにより、仮に容器 100 が保存状態で傾いており、キャップ 5 内に内容物が溜まっていたとしても、内容物がスリット S3 を介して容器本体 1 内に自動的に戻される。なお、内容物が粉末状や錠剤状である場合には

、容器 100 を振る等すればよいことは、既に述べたとおりである。

【0044】

次に、図 6 A 及び図 6 B、或いは図 7 A 及び図 7 B のような態様で、容器本体 1 の右側部分を右手で把持する。そして、この状態で、左手でキャップ 5 を回転させ、注ぎ口 2 から取り外す。続いて、カップ部 50 の口部側を鉛直上側に向けた状態でキャップ 5 を持ち、右手で容器本体 1 を操作して、注ぎ口 2 の内壁部 21 の先端をカップ部 50 の口部の鉛直上方に配置する。そして、右手で把持している容器本体 1 を傾けることで、注ぎ口 2 の空間 S2 から内容物をカップ部 50 内に充填する。このとき、キャップ 5 のメモリを参考にしつつ、内容物を取り出す。なお、容器本体 1 を傾ける際には、内容物がスリット S3 を介してこぼれ出さないようにするために、容器本体 1 の左側壁部 12 が鉛直下側を向く、すなわち、スリット S3 側が鉛直上側を向くように傾ける。

10

【0045】

内容物を取り出して使用した後、左手で持っている空になったキャップ 5 で注ぎ口 2 を閉じる。以上の作業中、凸部 30, 40 がストッパーとなり、右手から容器本体 1 が滑り落ちることがなく、安全に作業を行うことができる。

【0046】

< 3 . 変形例 >

以上、本発明の一実施形態について説明したが、本発明は上記実施形態に限定されるものではなく、その趣旨を逸脱しない限りにおいて、種々の変更が可能である。例えば、以下の変更が可能である。また、以下の変形例の要旨は適宜組み合わせることができる。

20

【0047】

< 3 - 1 >

上記実施形態では、容器本体 1 の注ぎ口 2 を除く部分は、概ね直方体形状に構成されていたが、任意の形状とすることができる。例えば、容器本体 1 の注ぎ口 2 を除く部分は、略楕円柱形状に形成されていてもよいし（図 9（A）参照）、略円柱形状に形成されていてもよい（図 9（B）参照）。また、容器本体 1 の注ぎ口 2 を除く部分の横断面形状は、略正方形であってもよいし（図 9（C）参照）、正方形以外の略正多角形であってもよいし（図 9（D）参照）、ただの略多角形であってもよい。さらに、凸部 30, 40 が設けられる外壁面 11 A 及び外壁面 13 A が、略平行であってもよいし（図 9（E）参照）、平面視において中央部が内側にやや窪むように滑らかに湾曲していてもよい（図 9（F）参照）。また、ここで挙げた例から明らかなとおり、凸部 30, 40 が設けられる外壁面 11 A 及び外壁面 13 A は、滑らかに湾曲している必要はなく、平らであってもよい。この場合も、手の親指及びその他の指が接触する複数の外壁面 11 A, 13 A 上にそれぞれ上述したような凸部 30, 40 を形成することにより、容器本体 1 の保持性を高めることができる。なお、図 9（A）～図 9（F）は、全て容器本体 1 の、凸部 30, 40 の下部 31, 41 が存在する高さ位置での概略断面図であり、参考として注ぎ口 2 の位置が一点鎖線で示されている。

30

【0048】

< 3 - 2 >

凸部 30, 40 は、外壁面 11 A, 13 A 上において、連続して延びている必要はなく、図 10 A ～図 10 C に示すように不連続に延びていてもよい。この場合、凸部 30, 40 の途絶える間隔は、上述したような指のストッパーとしての機能を確保する観点からは、指が通り抜けない程度であることが好ましい。

40

【0049】

< 3 - 3 >

外壁面 11 A, 13 A 上において、凸部 30, 40 の延びる方向は、上述したものに限られない。例えば、図 11 A に示すように、上部 32 が左右方向に平行に延びるように形成することもできるし、下部 31 が上下方向に平行に延びるように形成することもできる。また、凸部 30, 40 は、外壁面 11 A, 13 A 上において、図 11 B に示すように、折れ線状に延びていてもよいし、波打ちながら延びていてもよい。また、同じ外壁面上に

50

形成される凸部の本数は１本に限られず、複数本存在してもよい。この場合、例えば、複数本の凸部を、同様の方向に並走しつつ延びるように構成することができる。また、凸部３０から下部３１又は上部３２を省略することもできるし、これに代えて又は加えて、凸部４０から下部４１又は上部４２を省略することもできる。

【００５０】

< ３ - ４ >

注ぎ口２は、容器本体１の注ぎ口２を除いた部分と同軸であってもよい。また、外壁面１１Ａ，１３Ａ上において、凸部３０，４０は、左右に偏っておらず、中央付近に配置されていてもよい。

【００５１】

< ３ - ５ >

キャップ５及び注ぎ口２は、上述した実施形態に限定されず、キャップ５は、計量カップでなくてもよいし、容器本体１に対して着脱自在でなくてもよい。なお、キャップ５が計量機能を有していない場合において、キャップ５とは別に計量カップを用意することができる。また、キャップ５は、省略することもできる。

【符号の説明】

【００５２】

１００ 容器

１ 容器本体

１１ 正面側壁部

１１Ａ 外壁面（第１外壁面）

１３ 背面側壁部

１３Ａ 外壁面（第２外壁面）

２ 注ぎ口

３０ 第１凸部

３１ 下部（第１部位）

３２ 上部（第２部位）

４０ 第２凸部

４１ 下部（第３部位）

４２ 上部（第４部位）

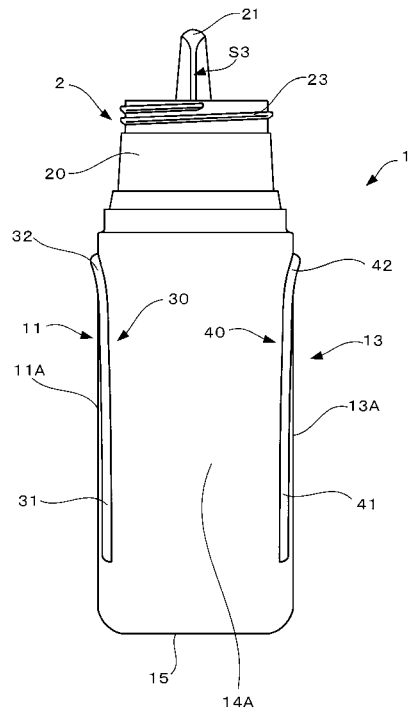
５ キャップ（計量カップ）

10

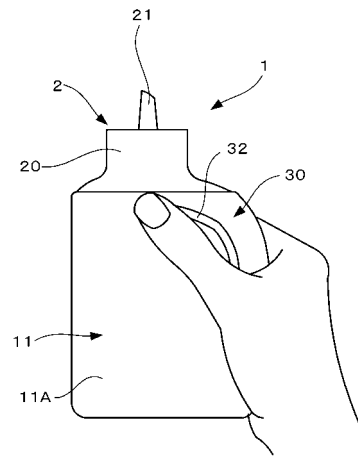
20

30

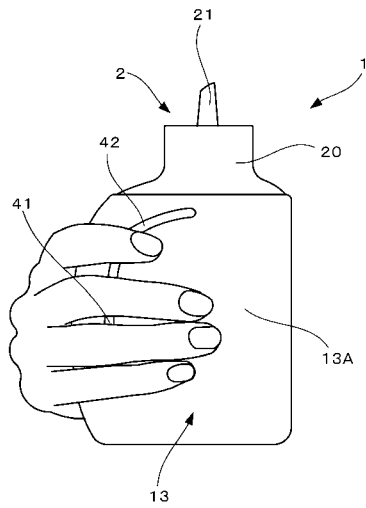
【図 5】



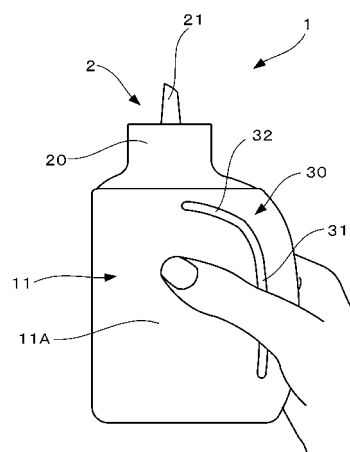
【図 6 A】



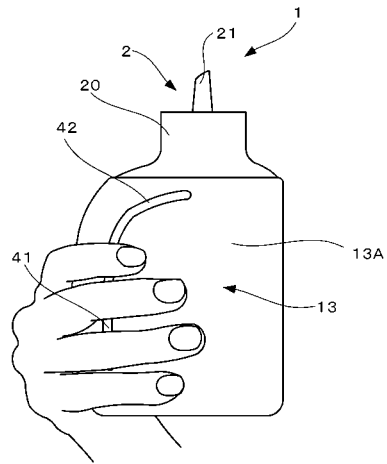
【図 6 B】



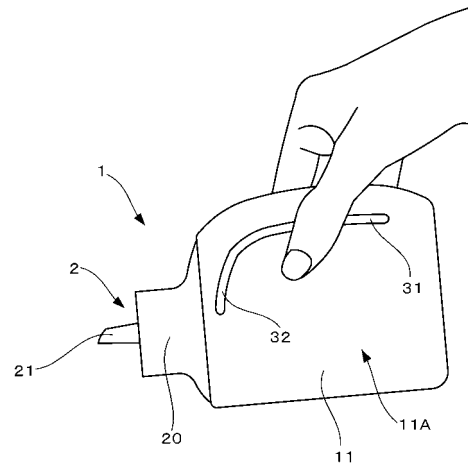
【図 7 A】



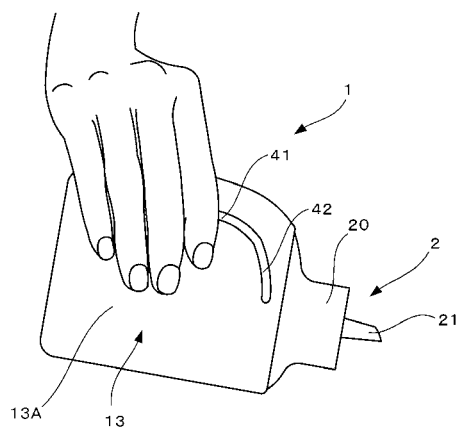
【図 7 B】



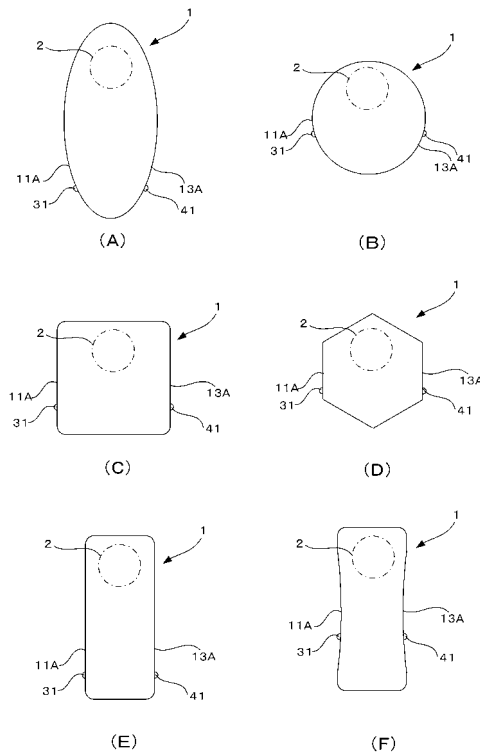
【図 8 A】



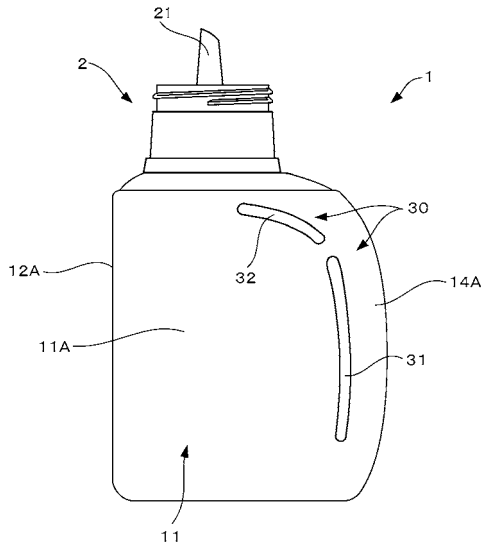
【図 8 B】



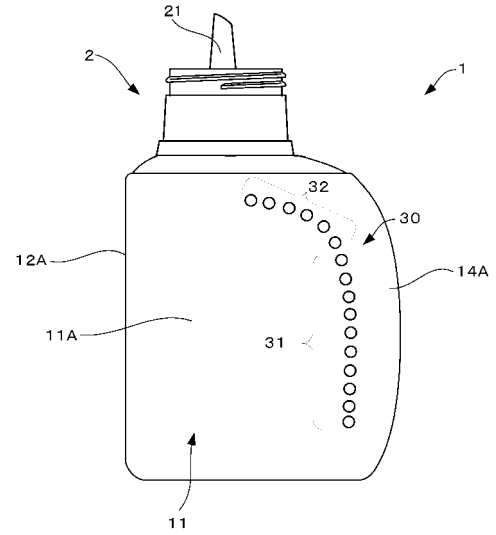
【図 9】



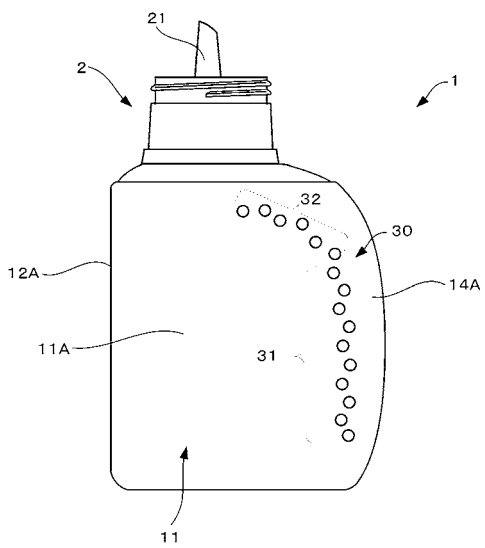
【図10A】



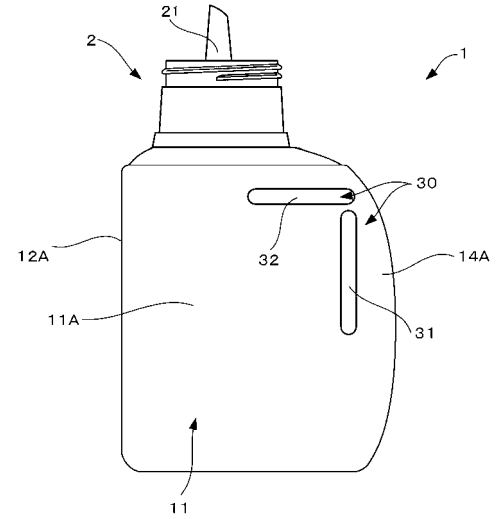
【図10B】



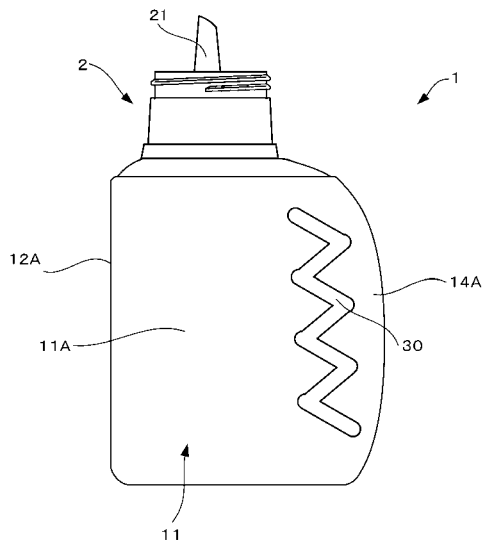
【図10C】



【図11A】



【図 11 B】



フロントページの続き

(72)発明者 中馬 章孝

大阪府茨木市豊川一丁目3 0 番3 号 小林製薬株式会社 中央研究所内

Fターム(参考) 3E062 AA09 AB01 AC02 AC08 BA07 BB06 BB10 HA02 HB09 HC01

JB05 JC02 KA02 KB03 KB17 KC06 KC07